

平成27年9月

三好雅之 学位論文審査要旨

主査 竹内裕美
副主査 片岡英幸
同 萩野浩

主論文

Relationship between quality of life instruments and phonatory function in tracheoesophageal speech with voice prosthesis

(ボイスプロテーゼを用いた気管食道発声におけるQOL測定具と発声機能との関連)

(著者：三好雅之、福原隆宏、片岡英幸、萩野浩)

平成27年 International Journal of Clinical Oncology

DOI:10.1007/s10147-015-0886-4

参考論文

1. モズク由来高分子フコイダンの腸蠕動に及ぼす影響

(著者：三好雅之、阿部直、笠木健、平松喜美子、池田匡)

平成25年 米子医学雑誌 64巻 69頁～77頁

2. 後輩学生への学習支援が4年次看護学生に及ぼす効果

(著者：三好雅之、谷村千華、野口佳美)

平成26年 米子医学雑誌 65巻 119頁～127頁

学 位 論 文 要 旨

Relationship between quality of life instruments and phonatory function in tracheoesophageal speech with voice prosthesis

(ボイスプロテーゼを用いた気管食道発声におけるQOL測定具と発声機能との関連)

喉頭癌などの疾患に対して施行される喉頭全摘出術は、発声機能の喪失を伴うため、術後の発声機能の再獲得がquality of life (QOL) 向上に必要不可欠である。近年、発声機能再獲得の方法として、以前から用いられていた食道発声法や人工喉頭に代わり、ボイスプロテーゼを用いた気管食道発声法（シャント発声法）が普及してきた。しかし、シャント発声法を用いている人のQOLと発声機能の関連についての報告はない。本研究の目的は、シャント発声法を用いている人の包括的QOLと発声関連QOLが、発声機能とどのように関連しているのかを明らかにすることである。

方 法

対象は、鳥取大学医学部附属病院耳鼻咽喉科頭頸部外科外来に通院し、代用音声としてシャント発声法を用いている男性20名である。術創が完全に治癒した後に発声機能検査を実施し、同時にThe 8-item Short-Form Health Survey (SF-8)、Voice Handicap Index-10 (VHI-10)、Voice-Related Quality of Life (V-RQOL) の3種類のQOL尺度の記載を依頼した。発声機能検査は発声機能検査装置Model PS-77Eを用い、最も出しやすい声の高さと強さで母音/a/を数秒間発声してもらい、発声時の声の高さ、声の強さ、呼気流率を測定した。

SF-8とVHI-10、V-RQOLならびに発声機能検査項目とSF-8、VHI-10、V-RQOLとの相関係数を算出し、両者の関連性を評価した。また、食道再建の有無による各QOL尺度の差異、術後経過期間と各QOL尺度との関連性を評価した。

結 果

SF-8のサマリースコアであるPhysical Component Summary (PCS) とVHI-10のカテゴリーである身体的側面との間で有意な相関がみられた。また、SF-8のサマリースコアであるMental Component Summary (MCS) とVHI-10、V-RQOLの合計得点、全てのカテゴリー得点で有意な相関がみられた。発声機能検査項目の声の強さとSF-8 (PCS)、声の強さとVHI-10の合計得点、身体的側面、機能的側面、そして声の強さとV-RQOLの身体-機能領域のカテゴリ

リ一間で有意な相関がみられた。食道再建の有無では全てのQOL尺度において有意な差はみられなかった。また、術後経過期間と全てのQOL尺度との間で有意な相関はみられなかった。

考 察

本研究では、声の強さとSF-8 (PCS) との間に有意な相関がみられたことから、声の強さを改善することによりSF-8 (PCS) の改善に繋がることが示唆された。SF-8 (MCS) とVHI-10、V-RQOLの合計得点、全てのカテゴリ得点で有意な相関がみられた。さらに、声の強さとVHI-10、V-RQOLのカテゴリ間で有意な相関がみられたことから、声の強さを改善することによりVHI-10、V-RQOLの得点が改善され、SF-8 (MCS) の改善に繋がることが示唆された。

一方、食道再建の有無でQOLに差がみられなかったことから、癌の進行度に関わらず、シャント発声法が可能となることがQOL向上に貢献すると考えられた。また、喉頭全摘出術後の時間経過とQOLには相関がみられず、術後に発声できていない時間が長期に及んでも、シャント発声法が可能となることによってQOLが向上することが示唆された。

本研究結果から、喉頭全摘出術後にシャント発声法を用いている人の包括的QOLと発声関連QOLには声の強さが影響しており、声の強さが発声リハビリの評価指標の一つとなることが示唆された。

結 論

喉頭全摘出術後、シャント発声法を用いている人の包括的QOL、発声関連QOLには、声の強さが影響していることが示された。